

ピカビアの星



松友視

「カビ」の星



ピカビアの星

定価一〇〇円

昭和六十二年十二月二十五日印刷
昭和六十三年一月七日発行

著者 村松友視

発行者 嶋中鵬二

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

振替東京二―三四

©一九八八 検印廃止

ISBN4-12-001631-5

ピカビアの星

装画
城戸真亜子

両手をポケットへ突っ込み、肩をいからせて足早にやって来たヤスは、店のあるビルの前まで来ると、急に真顔になって立ち停った。そして、三階のガラス窓に見える PIKA-BIA という店の名を見上げて、大きく息を吸い込んだ。これが俺の店か……開店して二年も経つのに、自分の店が持てたというのが不思議でならないという感覚が抜け切っていなかった。一階のスポーツ用具店をのぞくと、主人の白木さんが店の品物を点検していた。白木さんは三階のフロアを貸してくれた大家でもあった。ヤスは、ガラス越しに首を縮めるようなお辞儀をし、エレベーターへ向った。

（エレベーターで上るか歩いて上るか……）

たかが三階と思えば、階段を歩いた方が運動になるという気はした。だが、運動のためという理由が、逆に爺むさく感じられることもあり、そんなときはわざとエレベーターに乗った。ところが、エレベーターの扉が三階で開いたとき、誰かに見られてはいしまいかと気にする神経もあって、およそ自分の店へ向うとは思えぬ物腰になっていることがあるのだ。

（これも、俺の中途半端な年齢の成せるワザ……）

いつもと同じ眩きが生じ、ヤスはエレベーターの前で思案顔になった。そのとき、うしろで人のけはいがした。ふり返ると、白木さんが店の前へ水をまいていた。ヤスは、白木さんと目が合いそうになると、反射的に身をひるがえし、いきおいよく階段を上った。

（きょうは、俺がいちばんか……）

ヤスは、ドアの鍵を開けて店へ入り、陽よけのスクリーンを巻き上げるスイッチを入れた。映画が始まる前のような音とともに、スクリーンが上ってゆき、見馴れてはいるが漠然としたけしきが、ガラスの向うにひらけてきた。

ビデオに適当なビデオ・カセットを押し込むと、メローなロックを演奏するバンドが映し出された。バンドの名は知らなかったが、ヤスは動作をメローなロックに合わせていた。自分がいちばん早いとき、何ということもなく選んだビデオをかける。偶然にスタートするその画面によって、その日の色合いが決るといった思いがあるのだ。自分の一日の色合いがどのようになるのか……カセットをデッキに押し込むとき、奇妙な気の弾みをおぼえるのだった。

（きょうの色合いはメローってわけだ……）

ヤスは、スタジオに似た PIKA-BIA の中央に立って、いくつかの鏡に映る自分の軀が、かすかに丸みをおびてきたのではないかと思った。三十三歳……ヤスは、自分の年齢をきわめて中途半端な年ごろだと感じはじめていた。美容室のオーナーという立場も、似合っているようないな

いような手応えだった。

「おはようございます」

コロが、いつものように明るい声をかけながら、肩でドアを押して入って来た。両手で大きな紙袋をかかえ、軀ごと店へ突っ込んで来たように見えて滑稽だった。この店では、美容師の愛称を片仮名二字でつくり、その名前で呼び合うことにしている。ヤスは本名を略しただけのことだし、コロには小柄な軀と顔立ちの印象から単純につけた。こういう名前のつけ方は、ヤスが独立する前に働いていた「ソウル」という店の習慣の踏襲だった。「ソウル」の経営者貝塚鯛二が、ヤスという呼び名の名付親だった。しかし、ヤスの場合は本名の略称だから幼い頃から呼ばれてきた愛称と同じだ。

「でも、ヤスが成城に店を出すとは思わなかったなあ」

貝塚は、たまに会うたびにそう言って感心したような顔をつくった。ヤスは、もっと素朴な場所です朴な店をやるというふうに、貝塚は考えていたようだ。

成城駅北口の階段を降りると、すぐ右手に交番がある。交番の隣がフラワー・ショップになっているが、そのフラワー・ショップとスーパーストーン井のあいだの道を右へ入る。狭い小路に自転車が行けられ、ややジグザグに歩かなければならないが、小路を少し歩くと右側にスポーツ店があってそのビルの三階……成城駅北口からはほんの一分という場所を、ヤスは自分の店に選んだのだっ

た。喫茶店だったフロアーをそのまま使い、だだっ広い空間にそれぞれのスタッフの道具があつて、初めて入った者は美容室とは思えないという感じに仕立て上げている。

ヤスは、ドレッシング・ルームと呼ぶ小部屋へ入ってユニフォームに着替えた。PIKA-BIAのユニフォームはパジャマ・スタイルだ。縦縞の木綿のパジャマというスタイルは、むかしからヤスが思い描いていたコスチュームのひとつだった。科学研究員風の白い衣裳、監獄における囚人服、それに縞のパジャマというのが、ヤスが思い描いていた自分の店のユニフォームのイメージだった。その中から、スタッフのキャラクターを考え合わせた上で、パジャマを選んだのだ。パジャマという服は、襟のかたちをはじめとしてどこか古臭さを感じさせるし、ボタンが大きかったりして、近ごろのレトロ・ブームともかさなるセンスがあり、第一にうごきやすいというので、スタッフの評判は上々だ。

「だけど、ついこのまま街へ出て行ったらびっくりするだろうね。何しろ、ここは高級住宅街の成城だからなあ」

主任のシンは、冗談まじりにそんなことを心配したが、

「その場合は、これはパジャマではなくてパジャマ・スタイルだと、自分に言いかけせるんだな」

ヤスは、そう言っていたずらっぽく笑って見せたものだ。ひとつの恰好が、思い方によって部

屋着にも街着にもなる……そんな感覚はヤスの理想だった。

ヤスが着替えや軽い食事、あるいは短い休憩をとる小部屋をドレッシング・ルームと呼ぶのは、ボクシングやプロレスのドレッシング・ルーム控室という世界が好きだからだ。ボクサーやレスラーは、ドレッシング・ルームで軀をマッサージし、準備運動をし、試合のイメージをねり上げてからリングへ向う。あそこには、たしかなる役づくりをさせる空気があるはずだ……そんな感覚が、美容室にも当てはまるような気がした。「ソウル」の控室は、ドレッシングよりも楽屋という趣だった。向う先はリングではなく舞台といった感じだが、非日常、虚といった空間として仕事場をとらえているセンスは同じだった。「ソウル」の楽屋を、ドレッシング・ルームと置き換えたところに、ヤスの独立の気概がささやかにあらわれているのかもしれない。

ヤスがパジャマ・スタイルでドレッシング・ルームから出て来ると、スタッフが次々とやって来た。キャベツの芯のように目立たないスタッフの要であるシン、顔が何となく茄子なすに似ているナス、時代劇の殿様役が似合いそうなトノ、ヘア・スタイルをふくめたイメージが惹的なネギ、**“猫のタマ”**という感じのタマ、それにコロとヤスを加えた七人が、美容室 **PIKA-BIA** のオール・メンバーだ。

店の名である **PIKA-BIA** は、一八七九年生れのフランスの画家、マルセル・デュシャンやマン・レイらとニューヨーク・ダダの形をつくったフランソワ・マリイ・マルティネ・ピカビアか

らとった。ヤスはとくにピカビアという画家にこだわっているわけではなかったが、現代美術家である兄の影響だった。故郷の佐賀からこの東京へ出て来た……偶然に同じ軌跡をたどった兄に對する思いが、ヤスの中には抜きがたく存在しているのかもしれない。だが、そのところはヤスの中ではあいまいになっている。

（兄貴は兄貴、俺は俺だから……）

ヤスは、心の中で何度もそんなことを呟いた気がするが、それはいつも寂しい気分の中でだった。故郷ばなれ、親ばなれ、兄ばなれ……心の中で解決できずにいる事どもが、近ごろ妙に強く意識されるのだ。

（それもまた、あいまいな年齢のためか……）

ヤスは、そのところを深く突っ込んで考えないようにしていた。そうでないと、東京でやっと身につけたライト感覚が、次々と剝がれてしまうような気がするからだ。PICABIAをPKA-BIAとしたのにも、そんな神経がからんでいるかもしれない。スペルを変え、ハイフンを入れた理由を聞かれると、「ああ、読みやすいからね」ヤスはそう答えるだけだった。

「トノのコンテストいつだったっけ……」

ヤスは、客を待つだけになった頃を見計らって声をかけた。

「一週間後ですよ」

トノは、屈託のない声で答えてから、掌で腰のあたりを押える仕種をした。トノは、次に行われるヘア・コンテストに出場することになっていた。

「どうしたの、また持病の腰痛？」

「ええ、何だかコンテストが近づいてきたらまた出たみたいで」

「心因性の腰痛か」

「いや、心因性というより職業病のひとつですよ」

「職業病……」

「強い冷房の中にずっといるでしょ、だからタクシの運転手と同じ職業病になっちゃうんだって」

「なるほどね、タクシの運転手と同じ職業病か」

「しかもこっちは、腰に毛布巻いてるわけにもいきませんからね」

「でもさ、ほかの連中は腰痛なんかにならないんだよ」

「だから、ちょっと鈍感なんじゃないかって……」

「じゃあ、腰痛になるトノだけがふつうの神経ってこと？」

「たぶんそうじゃないかと」

「まあ、トノだからやわに出来てるっていうんなら分るけどね」

シンが、かるいフット・ワークでステップを踏みながら、からかうようにトノを小突いた。

「シン、そのうごきは何の真似ですか」

トノは、小突かれた肘を大袈裟にさすりながら、不思議そうにシンをながめた。シンは、ビデオのロックに合わせて、ダンスのようなボクシングのステップのような、奇妙なうごきをくり返していた。ヤスが、わざとそのステップを真似すると、ナスもコロもネギもタマも同じような仕種で、呆気にとられているトノを中心に回りはじめた。トノは、いまいましそうに腰に手を当て、皆の顔をながめていた。

（まるで、ディスコだな……）

ヤスは、美容室らしい雰囲気になることの少ないこの空間が、ディスコのムードにはたやすく染まってしまるのが面白かった。これもまた、ヤスの氣に入っている気分だった。

「あら、ミラーボールがないのが寂しいみたい……」

いちばんに入って来た高島トシ子が、ドアの外から店内の様子を茫然としてながめていたらしかった。

「あ、失礼しました」

ヤスは、あわててタマに目で合図し、シャンブー台へ案内するよう指示した。タマは、こんなとき急に仕事らしいムードをつくり上げるのに便利だった。大柄のタマがてきばきとうごくど、

それまでの緩慢なムードがいつべんに消し飛んでしまう効果があるのだ。

「しかし、タマの働きぶりってのは目立つよね」

ヤスは、いつもつくづく感心して言うのだ。

「それじゃ、まるであたしたちが働いてないみたい」

不満顔で言うコロをたしなめるように、

「いや、コロもネギも働き者さ。だけどね、同じように働いていても、タマの場合は目の覚めるような働きぶりに見えるんだよ」

ヤスはそう説明する。

「とくに、フロアをただ掃いているとか、椅子を移動させるとか、用具を運ぶとか……そういう何でもなさそうなことをしていても、タマがやっていると、あたかもすごいことをやってるみたいなんだ」

「……」

「まあ、モーションが大きいんだよね。軀の大きい者は案外モーションが小さいんだけど、タマは軀が大きくてモーションが大きい」

「そう言えば、そういうところあるわね」

「何でもないことが何でもなくないように見える……こいつは財産だよ」

ヤスは、本気でそう思っている。案の定、高島トシ子は、さっきのありさまなどすっかり忘れたかのように、タマの手でシャンプーを受けている。高島トシ子は、タマのシャンプーを格別に関心に入っている。

「タマちゃんのシャンプー、効くのよね」

いつか、高島トシ子はそんなことを言っていた。

「女の子ですから、タマちゃんっていうのはちょっと……」

「じゃ、タマさんかしら、それもおかしいわねえ。でも、二度くり返してるんじゃないから、タマちゃんでもいいんじゃない」

「あ、そうですね」

「とにかくね、シャンプーくらい個性が出る世界はないかもしれないわよ」

「……」

「ほら、頭に触れられるって、本当はあんまり好きじゃないって人が多いでしょう」

「ああ、そうですね」

「でも、シャンプーっていうのは気持ちいいのよね、とくにタマちゃんのは分りやすくて好き」

「分りやすい……」

「いま、何をやってるかが分りやすいの」

「はあ……」

ヤスは、高島トシ子の言葉に対してわざとあいまいな返事をしたが、彼女の言いたいことはよく分った。いま何をしているかという意味がはっきり伝わる……タマのシャンプーはたしかにそういうタイプだろう。そして、高島トシ子にとっては、そんなやり方が好みに合っているにちがいない。いい組合せだ、とヤスは思った。だが、シャンプーを受ける側にもいろいろあって、すべての客にタマのスタイルが合っているという保証はない。ごく自然なやり方を好む客もいるというわけで、ヤスはそのあたりに客商売の面白さがあると思っている。高島トシ子は、タマのシャンプーに髪をゆだね、心地よいまどろみさえおぼえているらしい。

朝は九時の開店だが、開店して早々の時間はおおむね予約が入っている。その時間は主婦、夫や子供を送り出したあとでやって来るケースが多い。きょうも、いちばんの高島トシ子につづいて次々と客がやって来て、ヤス、シン、トノ、ネギの鏡の前へ坐っている。

広いスペースをわざとそのままにしてあり、喫茶店であった当時のカウンターを残し、そこでコーヒーをいれて待っている客に出す。応接セットの近くにビデオデッキがあり、適当な映像が映っている。客の前にある鏡はあまり大きくなく、椅子も小さな移動しやすいのを使用している。空間に仕切りはないが、あっちこっちで勝手に仕事をし、客の相手をしているというありようを、ヤスは少なからず気に入っていた。名前を片仮名の二字にし、お互い呼び捨てにするという決り

も、客から見てスタッフの中に上下関係が見えないようにするためだった。それぞれが、それぞれのセンスで自分の空間を仕切る……それがいちばんいいと思っっているし、ヤスにとっても気が楽なのだ。

（それにしても……）

ヤスは、店でハサミをあやつりながら、こうやって自分の店が持ててしまったのを、不思議でならないと思うことが多い。地べたにへばりついてでも……といった類いのハングリー精神とか根性は、佐賀に生れたヤスにとってもっとも苦手な世界だった。とりたてて血を吐くごとき努力をした記憶もなかった。だが、自分の店を持つというルールが、当り前のように自分の前に敷かれていたかといえば、そうとも言えないはずだという感覚があるのだ。運……そう思うのがいちばん芯に近いかもしれないが、それだけでないのも事実だろう。ここを考えてゆくと、やはり手応えのない独白になってしまう。そして、ヤスはその独白が消えるのは惜しいとも思っているのだった。

（ま、とにかくにもピカビアは順風満帆だ……）

スタッフの給料を払い、家賃を払ってもやっていけるだけの収入は、どうやらクリアできている。自分の店をもつ……ということであれば、ここで目的を果していることになる。それ以上の目標はと聞かれて、ヤスの中にあまりあざやかな答えが生じない。そのことが自分のライト感覚